

【お話おばさんの西播磨昔話】 からうす（唐臼）

「遊んどるんやったら、唐臼で米搗いとして」お母ちゃんが言う。「ええで」と言うけど、これが力のいる仕事やった。

昭和の初めごろには、田舎の納屋の隅には、米を搗くために、シーソーみたいな面白い道具がどこの家にもあった。地面に固定した臼があり、そこへ玄米を入れた。柄の端を足で踏み、杵を上下させて穀類を搗くという仕掛けや。踏み臼とか、かる臼とか言うらしいが、わいらはちよっとなまって「からんす」と呼んでいた。

木の手すりを持って足で踏んで放すと、杵が臼の中の玄米を搗く。最初は1、2、3、4と威

勢よく踏んだけど、201、202と踏んでくると、のどはカラカラになるし、もう足もふらふらや。お母ちゃんに「もうきれいな白米になったで」と言うたら、「あほか。まだまだや」と言うんや。大人と違って、足短いや。根性つけて伸びあがって踏んどるのに、もうやっとなれへん。

「やーめた」言うて、ボール投げして遊んだ。しばらくして帰ると、米はきれいに片付いた。お母ちゃん、怒っとるやろなあ。最後まで手伝わんと遊んだのは悪いと分かっとるで。けど、子供にはしんどい手伝いやった。



からうす

注 昭和の初期まで唐臼は農家の各家にあった。その後精米所が出来て、リヤカーや車力で玄米を持って行った。最近は精米をした米がスーパーで買えるし、随所に無人の精米機もある。今でも精米するとは言わず「米を搗いてくる」というのは、昔杵で搗いたころの名残だろう。

【文責：浜田多代子】

定年後に趣味で百花繚乱 ～原田勝幸さんを訪ねて～

赤穂郡上郡町在住の原田勝幸さん（73）は、定年後色々な趣味を楽しまれています。13年間の集大成として平成29年11月に上郡町で個展を開催。会場には書、水墨画、洋画、日本画、石ころアート、竹細工等の作品が所狭しと展示されていました。

まず、書。篆書、隸書、行書、草書の掛け軸の数々。また地元



石ころアート作品

の古文書を掘り起こして解読された軸もあります。石ころアートでは、溪流の女王と呼ばれる山女魚が精密に描かれ水盤の中で泳いでいるかのようです。黒く塗られた石には大きな夜桜が鮮やかに浮かび上がっています。石は歩いて自分で探されます。竹細工では茶道具ほか数々。竹は古民家解体時に危うく廃棄される煤竹を使い時間をかけて制作されました。多趣味で精魂こもった作品ばかりです。

また、体力作りのために始めた太極拳の奥の深さに魅せられて、日々研鑽を積んでおられます。西播磨生活創造活動グループの拳友会を指導し、会員と共にボランティア活動にも広く取り組んでおられます。



作品を前に 原田勝幸さん

昔、映画「東京物語」の中で、定年後の人物が「一日がこんなにも長いとは・・・」と呟くセリフがありました。今後平均寿命が90歳時代とも言われ始めました。原田さんのように幅広い趣味を持って「一日がこんなにも短いとは・・・」と呟きながら健康でアクティブなシニアの日々を過ごせたら素敵だとは思いませんか？

【取材・文責：長尾智子】